

記録映画アーカイブ・プロジェクト 第4回ミニワークショップ

「記録映画の新しい活用例(2) —映画フィルムの4K変換」

2015年6月19日(金) 18:00-場所: 東京大学本郷工学部2号館9階93B教室

上映作品について

『法隆寺』は文化財保護委員会の委託で岩波映画が製作を担当。製作の吉野馨治は戦前1943年日本映画社時代に製作された『法隆寺』の撮影を担当している。前作はモノクロであった。羽仁進監督の『法隆寺』は1957年夏の終わりから3か月かけて撮影。

完成 1958年1月20日 カラー/23分・35mmリアグフアカラー、4KデジタルデータをPCから4Kプロジェクター(ソニーVPL-VW500)で上映。

スタッフ

製作 吉野馨治・工藤 充 監督 羽仁進 撮影 照明 若月荒夫 音楽 矢代秋雄 解説 芥川比呂志 協力 西岡梢次郎

撮影 瀬川順一 (1914年~1995年) 岩手県生まれ。

戦前・戦中・戦後を通じ、劇映画からドキュメンタリーにいたるまで、幅広い分野でカメラマンとして第一線で活躍。戦前、映画『戦ふ兵隊』(亀井文夫演出・三木茂撮影)のスタッフとして中国戦線に。戦後は東宝争議を闘い、フリーカメラマンとして活躍。代表作; 『銀嶺の果て』『ジャコ萬と鉄』『挽歌』『法隆寺』『不安な質問』『アントニー・ガウディ』『留学生チュア・スイ・リン』『水俣の凶・物語』

監督の言葉-カメラの眼で見た仏像たち

一番よかったのは、五重塔の塑像群です。ここは釈迦涅槃(ねはん)の情景です。中央に長く横たわっているのは、病にたおれたお釈迦さまです。その身体が木彫の上に黄金で塗られているのは、いままさに入寂した瞬間であることを物語っているのでしょう。ひげを長くはやした医者らしい男が、最後の脈をとっています。これをとりまく人々を包んでいるのは、いうまでもなく悲しみです。最前列にならんで声をかぎりに号泣している八人の羅漢たちのあるものは、瘦せたあばら骨を露わにしたまま両手をペツタリと地面について、泣いています。別の一人は、まるで近代彫刻のようなポーズで、うしろに身を投げかけ、空を仰いで泣いています。もう少し年も若く壮年らしい数人の羅漢は、演舌でもするような恰好で、両ひじを張っています。その太い眉をあげた表情も、悲しみよりは怒りにちかいようなすさまじさです。

—羽仁進「ものいわぬ主役たち」1958年より—

ゲスト: 小野定康さんについて

NTTの研究所において長年高品質映像技術の開発を手掛け、かつハリウッドの4k規格の確立に大きく寄与してきた。また劣化が進み従来のフィルムスキャナーではデジタル化出来ない古いフィルムに対し独自開発のフィルムスキャナーを開発して解決をした。平成25年に株式会社O&Gを設立。今回4Kテレシネ映像を提供して頂きました。

*開催案内の登録がお済みでない方は下記のURLよりご登録ください。

<http://www.kirokueiga-archive.com/form>